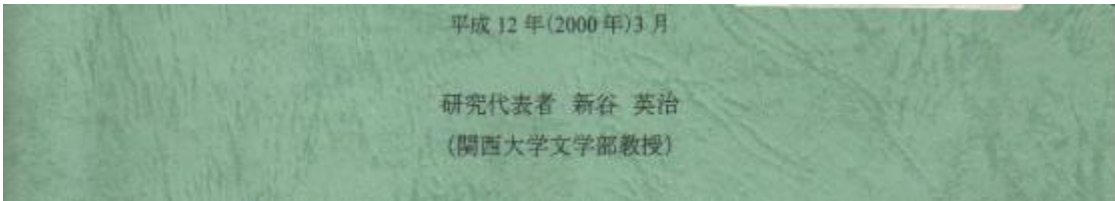


Mehmet Bildirici (1939)

"bbb" (bildirici bilgi birikimi)

email: mehmet_bildirici@yahoo.com

Prof. Dr. Kiyonori Kanasaka is friend of Mehmet Bildirici. He had visited Turkey and had met Bildirici several times. At first he wrote a book in Japanese language about, domestic water network of Konya. Here we see 'Konya Tarihi Su Yapıları' book.



12...2000

Prof. Dr. Kiyonori KANASAKA

sayfa 55

20) を訪れた。

以上のように、計3ヵ国において調査を行い、予期した以上の成果を得ることができたが、これは偏に協力下さった幾つもの機関と多くの人々のお陰である。

2. 主な収集資料について

次に、収集した主な資料(一部、コピーを含む)について種類ごとに列挙し、ごく簡単にコメントしておこう。

A) 書物・文献類

- A1 BİLDİRİCİ, Mehmet(1994) *Tarihi Su Yapıları: Konya Karaman Niğde Aksaray, Yalvaç Side Mut Silifke*, T.C. Bayındırlık ve İskân Bakanlığı Devlet Su İşleri Genel Müdürlüğü
- A2 ÖZİŞ, Ünal(1994) *Su Mühendisliği Tarihi Açısından Türkiye'deki Eski Su Yapıları*, T.C. Bayındırlık ve İskân Bakanlığı Devlet Su İşleri Genel Müdürlüğü
- A3 BÜYÜKYILDIRIM, Galip(1994) *Antalya Bölgesi Tarihi Su Yapıları*, T.C. Bayındırlık ve İskân Bakanlığı Devlet Su İşleri Genel Müdürlüğü
- A4 DSİ(1994) *Su ve Toprak Kaynaklarının Geliştirilmesi Konferansı Bildirileri, Cilt 1, Cilt 2, Cilt 3*, T.C. Bayındırlık ve İskân Bakanlığı Devlet Su İşleri Genel Müdürlüğü
- A5 DSİ VII. Bölge Müdürlüğü(1994) *DSİ Samsun Bölge Müdürlüğü Sınırları İçindeki Tarihi Su Yapıları*, T.C. Bayındırlık ve İskân Bakanlığı Devlet Su İşleri Genel Müdürlüğü
- A6 DSİ(1994) *Düşünceden Uygulamaya Atatürk Barajı*, T.C. Bayındırlık ve İskân Bakanlığı Devlet Su İşleri Genel Müdürlüğü

上記8冊は、DSİが1994年に創設40周年になったのを記念して刊行されたものであるが、このうち、A4の第2・3巻とA6を除いて歴史的給水などの歴史的水利が扱われている。また、A2や論文集であるA4(の第1巻)では全国の様々な地域が取り上げられており、その意味で貴重な文献をなす。尤も、DSIがトルコ全土の歴史的給水についてまとめたのはこれが最初ではなく、この10年前にも67県中30県から93の歴史的給水が取り上げら

2003

TURKISH POPULATION TRENDS

Prof. Dr. Kiyonori Kanasaka

Kyoto Üniversitesi

article Prof Kanasaka choosed 5 families as samples. One of these 5 families is BİLDİRİCİ family and story of the family from 1940 to 2000.

Kanasaka Türkiye'de ki Nüfus Hareketleri çalışması esnasında 5 pilot aile seçti, bunlardan biri de BİLDİRİCİ Ailesi.

18 April 2003

To Mr. Mehmet Bildirici

With the Compliments of the Author (Kiyonori Kanasaka)

Bildirici Ailesi 目次 157-

石川義孝 (1)

アジア太平洋地域における 人口移動変化の総合的研究

18

人口移動と人口動態の相互関連性とその地域的差異 高橋真一 (32)

平成 12 ~ 14 年度科学研究費補助金
基盤研究 (A) (1) 中川隆史 (53)

人口移動の若干の特徴— 1990 年センサスをもとに— 石原 義 (56)

課題番号 12308002
ジョージアにおける近年の国内
年センサスに基づく予備的考察— 熊石直樹 (90)

人口移動 山田 隆 (123)

研究成果報告書

ミクロなレベルでみたトルコの人口移動
の拡大家族の人口移動型についての記述を中心に— 金坂慎記 (142)

Bildirici Ailesi 157-159
Spatial aspects of intra-urban migration:
the exiter and the concept of "spatial configuration" Kazuko Tenaka (167)

第 II 部 国際移動

Some and thinking about migrations:
some remarks towards a historiography of population Ronald Skidgen (190)

合衆国におけるアジア系移民の動向
異状 (1963) 以降のハワイ州を事例に— 久武智也 (200)

国際人口移動転換— 先進論文の再検討を通じて— 石川義孝 (230)

Internal migration from Nagai, emigration
Harm Subed (252)

シア・サラワク州をめぐる国際労働力移動 渡田寛孝 (275)

研究代表者 石川義孝

ニュージーランドにおける韓国入移民の動向
年センサスデータを用いた— 金坂慎記 (290)

(京都大学大学院文学研究科・教授)

(2) Mehmet BİLDİRİCİ家の場合

次に、Mehmet BİLDİRİCİ家の場合をみてみよう。世帯主Mehmetは1939年の生まれであるから、先のDUNDAR家の末弟Ercanの1歳上、つまり世代的にはDÜNDAR家の兄弟と同じ世代である。BİLDİRİCİ家の祖先は元はアフガニスタンのホラサンに住んでいたが、Mehmetの4代前にはコンヤとベイシェヒルBeyşehirの間の村に移動した。そして曾祖父(1841-1915)はメドレッセの教師をしていたが、祖父(1879-1948)は農民で、ともに生涯をコンヤで送った。これに対して、父Nazımは正規の学校は出ておらず、メドレセで学んだ後、コンヤ

で食堂の店員として働き、1962～66年にはイスタンブルで学ぶ次男Hasimと共にイスタンブルに住んだ後、70年にコンヤで亡くなった。つまり、Turan DÜNDAR家の父と同様都市的職業に従事しており、一時期イスタンブルに出ていたものの、コンヤの住民として一生を送った点では異なる。そして、やはりコンヤに生まれた母はMehmetが今もコンヤに所有する家で暮らしているし、Mehmetの妻Düzayの両親もコンヤに生まれ、母はコンヤで亡くなり、父はコンヤに住んでいる。

このように、共に定着型の家に育ったMehmetとDüzayではあるが、2人は共に移動を経験する。すなわち、共に1957年にコンヤの高校を卒業した後、Mehmetはイスタンブル工科大学に入学のためイスタンブルに、Düzayはアンカラ大学文学部に入学のためアンカラに移動した。そしてDüzayは卒業した61年にコンヤに戻って工業高校の地理の教師になり、63年に結婚した後も、81年に退職するまで、女子師範学校次いでアタチュルク高校の地理の教師を勤めた。一方、Mehmetも、卒業後イスタンブル次いでコンヤで兵役につき、65年から72年までフリーの建設・設計技師として働いた。次いで、82年までの11年間はコンヤ工学校(現、セルチュク大学工学部)の教官を勤めた後、84年から95年まではDSİ国家水利事業庁第IV地域本部の職員になった。このように専門性を生かしつつも、職場を替えながらコンヤに住み続けたMehmetは、だがDSİ退職を機に、イスタンブルに転居した。それは、DSİをあげての歴史的水利事業に関する研究が91年から始まったのを機に氏が開始した研究を継続していく上でイスタンブルに住む方がよいということや、コンヤよりも気候的に住みやすいといった理由からであった。このように、先に述べたErcan DÜNDARと同じイスタンブル工科大学をErcanの1年前に卒業した後の移動の仕方は、きわめて異質なものであったものの、最終的には最高次の都市イスタンブルに居を定めるという点では、アンカラに住むErcanと共通するところがある。

しかも、大都市指向、高等教育指向という共通性は次世代、つまり、Mehmet夫妻の3人の子供に関しても認められると同時に、やや違った面も認められる。具体的な経過を記してみよう。

1982年にコンヤの高校を卒業した長男Öztuğは地元のセルチュク大学工学部地図学科を卒業しトルコ東南端のHakkariハッキーリで2年間の兵役に就いた後、約半年間同じ東南アナトリアの中心都市の1つDiyarbakırディヤルバクルの会社で働き、次いでセルジュク大学の助手になった。現在も同職にあるが、この間1991年から93年まではベルリンの大学に派遣され地図学で修士号を取得し、次いで、イスタンブル工科大学大学院で博士号を取得するためにイスタンブルへ移動した。そして2000年にセルチュク大学助手に復するためにコンヤに戻った。この間、96年には、自らはイスタンブルの生まれだが両親はコンヤ出身者である英語教師Banuと結婚した。長女Sibelはコンヤ第一の進学校であるアナドル高校を卒業した後、ハジェテベ大学薬学部に入學してアンカラに移動し、卒業(89年)後はコンヤに戻って病院の薬剤師になった。そして、同じ病院に勤めていた男性と92年に結婚し翌年アダナAdanaに移動した。それはアダナの出身で大学までアダナにいた夫が自分の故郷の病院に戻るためだった。自らも同じ病院で仕事を続けたが、98年に離婚すると1人娘Selinを伴って両親の住むイスタンブルに移動し、同系列の病院の薬剤師としての仕事を続けている。長女Sibelから7歳下、長男Öztuğからだ8歳下で、73年に生まれた次女Özlemの移動は個人の能力を最大限に生かそうという考え方をさらに鮮明に表すものだった。

